

平成22年 5月10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520218

研究課題名（和文） イギリス文学における東アジア表象についての文化的研究

研究課題名（英文） A Cultural Study on Representations of East Asian Regions in English Literature

研究代表者

伊勢 芳夫（ISE YOSHIO）

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：80223048

研究成果の概要（和文）：英領インドにおけるインド及び周辺地域への言語・文化政策を調査、およびアングロ・インディアン作家の小説を分析することにより、異文化に対するイギリス人の認識の特質を検証した。また、19世紀の人類学の著作を研究することで、人種主義に影響を与えた近代科学の特質や、白人優位的な世界観を明らかにした。

上記の英領インドと、日本の「西洋」受容を調査することによって、西欧列強から直接支配を受けなかった国への「西洋」の影響を検証した。

研究成果の概要（英文）：By surveying British Empire's policies towards languages and cultures in India and its surrounding areas, and by analyzing Anglo-Indian novels, I revealed the nature of English people's perception of different cultures. I also revealed the influence of modern science towards racism and White-oriented worldviews in the 19th century.

By comparing British India with Meiji Japan, I researched into the modernization of Japan under the influence of "the discourses of the West".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：英文学・オリエンタリズム研究

1. 研究開始当初の背景

19世紀、欧米列強による帝国主義的領土拡張の時代にあって、アジアは政治、経済そして文化の主体性を侵食され、それらに代わって、欧米のシステムに置き換えられてい

た。また、領土こそ保持したものの、日本も、伝統的な制度全般にわたって、欧米の基準をとり入れた国家建設を迫られたのであった。しかしそれは、単に非西欧圏が欧米の世界システムの中に組み込まれただけでなく、非

西欧人自身が欧米人の目を通して世界を見ることを余儀なくされていったのである。つまり、西欧人によるオリエント（アジア・アフリカ）表象が世界的に浸透していったのである。

今日のポストコロニアル状況において、非西欧諸国はそのような欧米主導の世界システムをいかに超克するか、西欧の言説でなく、自国の言説の中でいかに主体的に民族像・国家像、そして歴史を構築するかが重要な課題になっているのである。ただ当然のことながら、それぞれの地域が帝国主義の時代にどのような位置におかれたかが大きく影響している。インドの場合、近代国家の成立以前にイギリスによって政治、経済、軍事、そして教育に及ぶあらゆる面で主体性が剥奪されただけではなく、インドおよびインド人の表象が英語によって独占的に構築されたのであった。すなわち、西洋の文化ヘゲモニーの中に取り込まれていったのである。他方、日本の場合は、いち早く欧米列強の先端技術・文化を吸収し、近代国家を建設することによって政治的主体を維持しえたのであった。しかし、それにもかかわらず、同様に西洋を頂点とする文化ヘゲモニーの中に取り込まれていったのであった。

このような今日のアジアにおけるポストコロニアル状況を踏まえて、本研究は、欧米の世界システムの構築にもっとも重要な役割を果たしたイギリスの植民地政策と英語によるアジア表象の本質を分析しようとするものである。

2. 研究の目的

上記のように、19世紀以降、西欧の文化ヘゲモニーのもとにおかれたアジアにおけるポストコロニアル状況を踏まえて、本研究は、欧米の世界システムの構築にもっとも重要な役割を果たしたイギリスの植民地政策と英語によるアジア表象の本質を分析しようとするものである。特に、イギリスの支配のもとで近代化・西欧化の基礎が築かれていったインドと、イギリス等の欧米の影響下で自らが近代化・西欧化を行った日本について、それぞれの近代化をつぶさに観察し記述したイギリス文学作品を中心に、歴史資料を分析することによって、非西欧地域が、如何に欧米の言説のなかに取り込まれ、そしてそこから脱出しようとしてきたかを解明していくことが研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者の単独研究として、科学研究費補助金による研究期間に、本研究全般に係る調査と、インドに焦点を当て、イギリス領インドにおける植民地政策、およびイギリス人によるインド表象の構築に関し

て調査分析を行った。

19世紀、イギリスは、非西欧地域についての『英国議会報告書』等の政府刊行物、エドモンド・カンドラー等の報道特派員によるアジア紹介・旅行記、民俗学・文化人類学による調査報告書、および旧植民地圏の研究者によるイギリス人の帝国主義・植民地主義についての研究書が数多く出版されている。本研究では、イギリスの異文化理解、植民地政策を含む外交政策、非西欧人に対する理解と偏見の、全般的な傾向と歴史的推移を見定めるために、上記の資料を可能な限り多く調査し、収集した。ただ、そのような資料は日本国内には十分に存在しないために、イギリス国内のブリテイッシュ・ライブラリー等の図書館や、書店での資料収集を行った。

上記の調査のなかでも、イギリス領インドにおける植民地政策、およびイギリス人によるインド表象の構築に関する調査を特に詳細に行った。イギリス領インドにおける植民地政策、およびイギリス人によるインド表象という研究については、既に平成10年から、国内で入手可能な資料と、文部科学省在外研究員としてイギリスに滞在中に収集した資料により、研究を進めてきた。平成19年度以降は、さらにそれを推し進めるべく、資料を収集し研究を行った。

また、イギリスによるインド植民地政策とインド表象を研究するのに加えて、「インド国民会議派」といったインド・ナショナリズムの台頭と、それに対するイギリスのとった政策を、イギリス人だけではなくインド人の著作を調査し、分析するした。インド人の英語作家の研究が広く行われているインドのジャーナル・ハルラル・ネルー大学・言語文学文化学院において、研究のアドバイスを得るとともに、資料収集を行った。

つぎに、チベット、そして、中国・日本に焦点を宛て、それぞれの地域に対する英語言説での表象を分析し、イギリス人が東アジアを如何に理解し、あるいは言語化し、東アジア表象を構築していったかを、そしてそこに内包するイデオロギーとは何かを解明した。

要約すると、本研究の研究方法は、1. イギリス人のアジアの諸地域における文化に対する理解とアジア・アジア人表象に内在するイデオロギーの分析、2. イギリスによるインドの伝統文化を否定した英語教育と近代化政策にみられるイデオロギーの分析、3. 欧米の言説の影響下における日本の近代化の特質の分析について、歴史的資料を収集し、地域的な差異を比較検討することにより、それらの特質を明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1) 初代インド総督のウォレン・ヘイステイニングズによるインド及び周辺地域への言

語・文化政策を調査することにより、18世紀末の異文化に対するイギリス人の認識の特質を検証するとともに、東洋研究とインド表象、そして、そこに潜むイデオロギーを明らかにした。

(2) 1935年からのT・B・マコーレーによる英語教育政策を調査することにより、イギリスの植民地政策の中に人種主義の影響を見出すとともに、アルテュール・ド・ゴビノーやロバート・ノックスの著作を研究することで、西欧人の人種主義に影響を与え、1960年代に隆盛を極めた科学的人種主義の特質を明らかにした。

(3) アングロ・インディアン作家(植民地時代のインド在住のイギリス人)の小説を分析することにより、イギリス人のインド・インド人表象の特質を明らかにした。

(4) 18世紀末のチベットへの旅行記、及びイギリス軍による1904年のチベット侵攻の従軍報道を調査することにより、情報のほとんどない地域でのイギリス人の文化接触の特質を分析した。その結果、イギリス人の白人優位的な世界観は、19世紀を通して強化されたことが判明した。

(5) 中国・日本を扱った小説を調査することにより、イギリス人の東アジア表象の特徴を明らかにした。また、イギリス人から見た「近代日本」との比較を通して、日本人による「西洋」受容を調査することによって、西欧列強から直接支配を受けなかった国への「西洋」の影響を検証した。

(6) 平成19年度～21年度の研究成果としての博士(文学)(大阪大学)の学位を取得した。以下、博士論文の要旨である。

19世紀から20世紀初頭にかけて、イギリスが帝国主義的拡張を行う過程において、単に軍事・政治・経済的支配のもとに被植民地やその周辺地域を支配下に置くだけでなく、言説レベルで、英語がそれらの地域を言語化することで覆っていったことを検証した。研究方法としては、イギリス小説を中心とした著作を取り上げ、それらに現れるインドと日本の表象を比較検討することによって分析を行った。

まずインドに関しては、イギリスは、19世紀から20世紀にかけてのインドの植民地経営を通して、インドを英語で知識化し、その知識を権威ある情報として世界中に流通させるとともに、インド人に「インド(人)」表象・アイデンティティを強要することで、インドの近代化を図ろうとしたのである。それはポストコロニアル的見地からいえば、「真のインド(人)」のアイデンティティを隠蔽し無化する西欧中心主義的行為であり、独立後のインドにおいてはじめて、押しつけられたアイデンティティを解体し、真のアイデンティティを再構築する作業が始まった

のだという解釈がなされている。しかしながら、本論文では、インドの植民地化以前には、近代的な意味での「インド(人)」アイデンティティは存在しなかったという立場から、イギリスによる植民地政策のもとで、近代的な「インド(人)」アイデンティティの成立のための前提条件が与えられたことを例証した。さらに、イギリスの帝国主義的拡張と新世界システムの構築に呼応して、英語言説が複数の文化や価値体系を取り込むように変質していったことにより、「インド(人)」表象がサイドのいう西欧の欲望の投影した二項対立的鏡像を超え、より多層的な表象に絶えず書き換えがなされていったことを、アングロ・インディアン小説を使って検証した。もちろん、そのような多層化した表象と雖も、その表象化を行う主体はイギリス人であるので、インド人が主体者としてそれを修正、あるいは再構築をする必要があることは言うまでもないことである。

また日本に関しては、イギリス人による「近代日本」表象と、明治期の知識人による「西洋」と日本の近代化を扱った著作を比較検討することで、日本がどのような近代日本のマスター・ナラティブを構築していったかを検証し、以下の結論を得た。

江戸時代の鎖国が黒船来航によって維持できなくなった後、日本は、「西洋」からの軍事・外交・経済的圧力に加えて、言説レベルの脅威にさらされた。そのような「西洋」の言説に飲み込まれる状況下において、日本は、明治20年頃までは極端な欧化政策を実施したが、やがて国粋主義の傾向が強くなり、言説レベルで西欧に対抗するために、領土的拡張とともに、日本語による東アジアの言語化を行っていった。しかしながら、相対的で多層的な世界認識ができないまま、太平洋戦争での敗戦を迎えることになり、英語言説のような質的変貌を遂げることはならなかった。本論文では、上記の英語言説の変容、およびそれに伴う「東洋」の表象の多層化を歴史的、理論的、そしてテキスト分析によって検証したのであるが、特にテキスト分析においては、3人のイギリス人作家、フォード・マドックス・フォード、ジョゼフ・コンラッド、ラドヤード・キプリングを取り上げ、世界システムの形成に伴って、多様な文化や価値体系を如何に小説作品に取り込んでいったかを検証した。その結果、フォードとコンラッドについては、小説の語りにモダニズム的手法を導入することにより、開かれた浸透性のある物語構造を創出し、キプリングは、伝統的小説手法を使いながらも、異文化を表現するために文化コードの過剰コード化を行ったことを論証した。(以上、博士学位論文要旨)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①伊勢芳夫、「「信じる」ということの一考察——「自明」を生み出すメカニズム——」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅣ』、言語文化研究科、木村茂雄他 5 名、p.41-p.46、2009 年、査読無
- ②伊勢芳夫、「揺らぐ語り——転換期の作家(2)——全知から個人の視点へ——」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅢ』、言語文化研究科、木村茂雄他 6 名、p.21-p.28、2008 年、査読無
- ③伊勢芳夫、「文化研究のメタ言語——脱政治的記述の可能性——」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅡ』、言語文化研究科、木村茂雄他 5 名、p.31-p.40、2007 年、査読無

[学会発表] (計 1 件)

- ①「英領インドを守る戦争の大義とその喪失について」、『シンポジウム「戦争と英米文学」』、福岡忠雄、長澤唯史、野間正二、伊勢芳夫 (2008 年 12 月 20 日、日本英文学会関西支部 3 回大会、於 関西学院大学)

[図書] (計 3 件)

- ①伊勢芳夫、「ポール・スコットの『ラジ 4 部作』と英領インドの終焉」『英米文学の可能性——玉井明教授退職記念論文集』、英宝社、服部典之他 70 名、p.91-p.104、2010 年
- ②伊勢芳夫、「「反抗者」の肖像——表象のメカニズムの理論的スケッチ——」『英語文学の越境』、英宝社、木村茂雄他 9 名、p.24-p.41、2010 年
- ③伊勢芳夫、「超域文化の歴史的考察」『言語文化への招待』、大阪大学出版会、木村健治他 20 名、p.91-p.104、2008 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊勢 芳夫 (ISE YOSHIO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：80223048